

「若者向け環八郎湖環境学習プログラムの普及可能性に関する調査」

大学生インタビュー調査報告書

実施・作成者：特定非営利活動法人はちろうプロジェクト

1. 事業概要（抜粋）

【調査の目標】

- ①「若者向け環八郎湖環境学習プログラム」のニーズに関するインタビュー調査
→八郎湖流域の地域づくりに参画する若者を増やすため、その候補者たちのニーズを知る。
- ②八郎湖の土着沈水植物復活に向けた水槽設置実験、および水槽設置候補地の調査
→沈水植物復活による生態系再生を、若者や地域を巻き込んで行っていく可能性を探る。
→水槽設置による新たなコミュニティづくりができる候補地を探る。
- ③環境教育を手段とした、地域おこしの先進事例調査
→当法人が目指す、明るい地域づくりの先進事例を学び、今後の課題を明らかにする。
→そのために協力が必要なステークホルダーを巻き込む。

【内容】

- ①「はちプロ学生部」に参画する、下記2大学の学生5人程度を対象としたインタビュー調査を行う。
インタビュー内容から、八郎湖流域の地域づくりに若者が参画してもらうための課題を明らかにする。
 - ・秋田県立大学・・・2/5（金）14：00～16：00当法人と最も関係が深い大学で、八郎湖や環境について学んでいる学生が多い。
八郎湖に関心を持つ学生によるサークルがある。
 - ・秋田公立美術大学・・・2/22（月）13：30～15：30当法人の教材「はちりバ～HACHIRO REVIVAL～」開発事業で多数の学生に協力してもらった。
「地域プロジェクト演習」という授業の一環で、八郎湖の活動に参加してもらっている。

【インタビュー内容】

- (1) 氏名、大学の所属、学年、出身地、大学で頑張っていること（学内・学外問わず）を教えてください。
- (2) 八郎湖に興味を持った時期と、そのきっかけを教えてください。
- (3) はちろうプロジェクトについて知ったきっかけ、学生部に参画してみようと思った理由を教えてください。
- (4) ここまで参画してきて、八郎湖にどんな魅力があると思いますか？その魅力を活かす若者向けの活動はないでしょうか？

- (5) これから皆さんの同年代や後輩の学生たちに、八郎湖での活動に関わってもらうためには、何があるといいと思いますか？
- (6) 現時点で、大学卒業後の進路にはどんな希望がありますか？それは、八郎湖の活動に関わってから変化したところがありますか？
- (7) ここまでのインタビューを通して気付いたこと、話せなかったことなどがあれば、教えてください。

【参考：2020 年度「はちプロ学生部」の主な活動】 ※新型コロナウイルス対策を取って実施しました。

No.	実施日	活動名	参加メンバー人数	活動概要
1	6/11(木)	(Zoom) 顔合わせ会	9 人	今年度メンバーによる顔合わせと、新メンバー向けの解説や今後の活動予定などを話した。
2	6/18(木)	(Zoom)「八郎潟干拓ロールプレイ」お話し会	10 人	新規環境学習プログラム案を試行し、課題等について意見を出し合った。
3	7/2(木)	三倉鼻&草木谷ホタル観賞会	6 人	三倉鼻公園から八郎湖の様子を一望。その後草木谷でホタル観賞を行った。
4	7/9(木)	「八郎潟モグリウム」水槽設置	4 人	「八郎潟モグリウム」水槽をうたせ館と秋田県立大学の 2 カ所に設置した。
5	8/8(土)	ザリガニ釣り&草木谷生きものの調査	2 人	大潟村ピオトープでのザリガニ釣り、草木谷での生きものの調査を実施した。
6	10/3(土)	モグリウム水槽設置&ミニ観察会	3 人	八郎潟小学校にモグリウム水槽を設置。うたせ館モグリウムの観察を行った。
7	10/11(日)	魚類調査&ザリガニ駆除	2 人	八郎湖の魚類調査を専門家の指導の下で行った。大潟村ピオトープのザリガニ駆除を行った。
8	10/20(火)	モグリウム水槽設置	2 人	秋田中央高校にモグリウム水槽を設置する活動を補助した。
9	11/16(月)	モグリウム水槽設置	2 人	メンバーの提案により、秋田県立大学学生寮前に小型モグリウム水槽を設置した。
10	11/29(日)	プロジェクト WET 講習会	5 人	体験型環境学習プログラムプロジェクト WET の指導者資格を与える講習会を行った。
11	3/2(火)	(Zoom) 青森大学の取組み勉強会	1 人	青森大学・藤公晴先生から、青森大学の環境学習の取組みについて教えていただいた。
12	3/9(火) -10(水)	秋美生・うたせ館ワークショップ	6 人	メンバーの提案により、うたせ館で 1 泊 2 日の八郎湖調査 WS の受け入れを行った。



↑ 「八郎潟干拓ロールプレイ」お話し会



↑ 三倉鼻&草木谷ホタル観賞会

2. 秋田県立大学 学生インタビュー概要

【日時】2021 年 2 月 5 日（金）14：00～16：00

【会場】秋田県立大学 教室

【インタビュアー】

NPO 法人はちろうプロジェクト 副代表理事 谷口 吉光（秋田県立大学教授）、

※以後、「はちプロ」と略す

事務局長 鎌田 洋平

【対象者】



氏名	野宮 蓮 さん	井上 明香里 さん	生田 あいり さん
所属・学年	生物資源科学部 生物環境科学科 2 年	生物資源科学部 生物環境科学科 3 年	生物資源科学部 生物生産科学科 3 年
出身地	静岡県	秋田県湯沢市	北海道
はちろうプロジェクトとの 関わり	2020 年～	2019 年～	2018 年～
大学で頑張っていること	水鳥のガン類の調査	自主研究：リンの回収剤の研究	専門の研究室実験

【インタビュー内容】

（１）

鎌田） 皆さんが大学で頑張っていることについて、詳しく教えてください。

生田） シアノバクテリアと大腸菌を用いて、大腸菌の性質を利用して遺伝子組み換えや PCR を利用してシアノバクテリアに含まれている、生きるのに使う糖が 2 種類あるんですけど、その 2 種類のうちの 1 つを研究しています。パートナーがいてもう一種類の方、分担してやっています今。

井上） 一年生から自主研究で水からリンを回収するっていう資材…。リンの回収剤の研究をしていてその中で炭とかあとヘドロとか自然にあるものというか、八郎湖周辺にある資材でリンを回収できる資材を作るというのを今まで続けてきています。

野宮) 冬期は水鳥のガン類の調査、メインとしてはハクガンを対象にしている、まだ調べ始めたばかりなので、ここからデータを蓄積して何か文章を書けたらなと思っています。

鎌田) ハクガンの調査はどこでやっているんですって？

野宮) 大湯村です。大湯村は、日本でも有数のガン飛来地なので。多分温暖化の影響で今後越冬地化が進んでいくと思うので、そのことも含めながら調査でしっかりデータをとれたらなと思っています。

(2)

鎌田) 八郎湖に興味を持った時期とそのきっかけを教えてください。

生田) まず時期は、1年生のサークル勧誘が始まるちょい前のポスターですね。

鎌田) あーあれか。Sさんが作ったポスターだよな？

生田) はい。生物系のもので、なおかつフィールドワーク系のサークル、あー楽しそうだ！と思ったのと、あと地元に阿寒湖っていう国立公園内の結構有名な湖があるんですけど、それと比べたというかちょっと懐かしんでといいますか、八郎湖じゃない八郎湖じゃないですか。ちょっと離れたところだけど、湖同士を比べた時にどういう違いがあったり、どういう共通点があるのかなと興味を持ちました。

鎌田) 確認ですけど、サークルはパチカンのことだよな？

生田) パチカン(※“八郎湖環境を考える会”。現在も存続)です。

鎌田) そうだね。1年生の時にはちリバ(※“はちリバ～HACHIRO REVIVAL～”。大学生の協力を得て、はちプロで開発したゲーム教材)作るのに参加してくれていたもんね。

井上) 私は高校2年生の時に知りました。

ちょうどインターンシップというかジョブシャドーイングをしないといけない時期で、担任の先生が県北出身の人なんですけど、県北のほうに汚い湖があるって聞いて、それを調べている人達がいて、かつ分析科学センターの人達がやっているんだよっていう話で「あ、そうなんだ」みたいな感じでした。オープンキャンパスに来たときに、はちリバの開発の中にいた生態工のAさんが声をかけてくださって、藤林恵先生の公開授業に呼んでくれて、八郎湖で汚くなっている原因がアオコなんだっていうのを知って、どんどんアオコの魅力っていうか、アオコについての話を聞くうちに、八郎湖にも興味を持ったという感じになりますね。

鎌田) ちなみに、インターンシップではどこに？

井上) 分析化学センターに。調査系というか測量系の会社なので、県から委託されて八郎湖のやつもやっているみたいな話をしました。

鎌田) そのときに汚い湖として八郎湖を知ったと。それまでは八郎湖については知らなかった？

井上) はい、全く。大潟村っていうのがあるくらいしかわからなくて。そこに湖があることとか、そこがもともと湖だったみたいな話は全く聞いたことがなくて。汚くなっている自然というか。

わりと湯沢(※八郎湖からは100km以上離れている)って山に囲まれているし、なおかつ自然が豊かで綺麗な場所っていうイメージが強くて、水質が悪いっていうか、下水道みたいな湖があるみたいなのは、言い方悪いですけど、人的な影響を受けたのは初めて聞いたので、興味を持ちました。

鎌田) 湯沢で育ってきて八郎湖の問題について聞く機会っていうのはまずなかったっていうことかな？

井上) そうですね。高校までほぼ聞いたことなかったです。

野宮) はちプロについて本格的に調べ出したのは、多分去年の4月くらい。その前の年の冬くらいにガンを調べ始めて、ガンに興味を持ったことから、まずどこに来ているのかっていったら、大潟村に来てるってことで。じゃあ、大潟村っていうのはどのくらい自然が豊かで、田んぼの生き物調査を自分たちでやってみたりして、だんだん湖のほうにも目を向け始めたっていうのが、興味というか八郎湖に携わろうと思ったきっかけです。

鎌田) 八郎湖っていう名前は秋田に来てから知った感じ？

野宮) そうです。

鎌田) 昔からそういう鳥とか好きだった？



野宮) そうですね。鳥は小学生高学年の頃から。低学年の頃は結構、学校の中に小さいせせらぎがあって、そこで放課後とかは虫を…水生昆虫とか採りまくっていたので、もともと水辺に興味があったのかもしれないっていう感じはありますね。

(3)

鎌田) 次に行きたいと思います。私たちはちろうプロジェクトについて知ったのが、どういうきっかけだったかということ、学生部に参加してみようと思った理由を教えてくださいなと思います。

生田) いつって言うのはさっきと同じなんですけど、パチカンが先で、八郎湖が後でした。きっかけとしては当時やっていた、はちリバの活動をわずかながらもご協力させていただいた時に、サークル全体の雰囲気を楽しみながらも真面目にやっていて、誰も茶化すことなく教え合っているみたいな雰囲気に惹かれてここだったら私も生物生き物環境系を楽しみながら学べるのではないかなと思って参加を決めました。

鎌田) きっかけはサークル勧誘で、Sさんがパチカンってやってますというのを聞いた感じかな？

生田) 生物系のサークルばばっとみた時に、いくつか目をつけつつ最終的に選んだのがここみたいな。

鎌田) もともと生物系が好き？

生田) はい。好きでした。

井上) 大学に入る前から、はちプロとかそういう活動があるっていうのはなんとなくオープンキャンパスとかで知っていて、でもやっぱり自分の自主研とかやりたいことがあったのと、生き物をメインにやっている感じというか…。私は資材とか物理化学系だなと思ったので、1年生の時は入らなかったんです。

鎌田さんが出ていた日本環境教育学会に参加して何回か質問してた時に、湯沢出身ということで食いついていただいて、名刺をいただきました。「湯沢でプロジェクト WET（※“水”をテーマとした体験型環境学習プログラム）を紹介することがあるから来てみない？」って言われて。金澤伸浩先生のところの学生さんとかと一緒に WET とかそういうはちプロ関係というか…八郎湖周辺で結構活動的にやっているっていうのをいろいろ聞いて興味を持って、あやかちゃん（※学生部メンバーの一人）に人数が足りなくて滅亡の危機だから来てって、いろいろ水草もやっているよって言われて、水草とか興味のあることに参加したいなって思って入ったりとか、WET の講習に行ったりとかの関わりを。

鎌田) そうだったね。思い出しました。そこから興味を持ってくれたんですね。

野宮) 僕がはちろうプロジェクトを知ったきっかけは、谷口先生から声をかけていただいたことになります。そもそも谷口先生と引き合わせていただいたのは、僕に鳥を指導というか、ご助力いただいている“大潟村の自然を愛する会”の堤朗さんって方から「秋田県立大学だったらこの先生に頼りなさい」ということで、谷口先生のところに顔を出して、そこからうちはこういうことやっているよってことで…。そのときも大潟村の湖の周辺も含め、自然について勉強したいという思いがあったので参加してみたら水草もあるので。じゃあどんな活動をしていて、水草ってどんな魅力があるんだろうってことが気になったので参加しました。

鎌田) なるほど。ちなみに堤さんとはどういうきっかけで知り合っていたんですか？

野宮) 大湊村の床屋さんで、村の床屋さんって結構村の方が利用していて、僕もそこ行っていて鳥が好きなんだって話をしたら「大湊村にすごい人がいるよ」ってことで引き合わせていただいて。

鎌田) それで会いに行ったんだ？

野宮) 連絡先をちょっと床さんに教えておいて、連絡先交換していただいて、そこから連絡を取り合ったりとかして、一緒に鳥を見に行くからどうですか？みたいな感じで、一緒に鳥を見に連れて行ってもらいました。

鎌田) すごいですね。大湊村の床屋から人づてに来てるわけですね。面白い。よく実際に連絡したね。大湊村の床屋さんから堤さんを紹介され、堤さんから谷口先生を紹介され、谷口先生の紹介ではちプロのことを知った流れなんですね。わかりました。こうして見ると、三者三様ですね。谷口先生と野宮くんが最初に会ったのはいつ頃なんですか？

野宮) 学校が始まってなんかの時に、コロナだったけど登校しなきゃいけない時が何回かあって、それで顔を出しているついでに今時間があるから会おう。堤さんにとにかく会いなさいって言われたので、それで谷口先生のところに行ってちょっとだけ話を聞いてもらってみたいな感じですね。

(4)

鎌田) 次に行きたいと思います。みなさん、ここまで“はちプロ学生部”に参加してもらって、八郎湖にどんな魅力があると思いますか？自分が思う八郎湖の面白さっていうのを教えてほしいなと思います。その上で、自分で気づいた魅力・面白さを活かす、若い人向けの活動がないかなっていうことを考えているんですけど、なんかこんなことやったらいいんじゃないっていう案があれば教えてほしいなと思います。まずは八郎湖、どういうところが面白いと思うかを詳しく教えてください。

生田) 自然。動物とか鳥類、魚…やっぱりそこが一番なんですけど、知っていくうちに八郎湖で生活していた人達の独特な生活圏っていうんですかね、生活の魅力に惹かれたりとかもしましたね。

鎌田) その、人の生活の魅力っていうのは、もうちょっと具体的には？

生田) お舟。展示されているじゃないですか？

鎌田) うたせ舟のことかな。

生田) そう。あれがっこいい。あれ、八郎湖のでっかい田舎であれで漁をしているのがっこいいなと。

鎌田) もうちょっと詳しく聞きますけど、さっき身近に阿寒湖があるっていったじゃないですか。阿寒

湖はとても自然が綺麗な場所って言うイメージがあるんだけど、ぶっちゃけ八郎湖は井上さんが言っていた通り汚い湖として有名なわけで、その中で八郎湖の自然や鳥や魚の魅力っていうのは、どういう所にあると思います？

生田) 私の地元の阿寒湖は、割と人里離れた山の中にドンッとおあるみたいな感じで、そこが観光資源になっていて、もちろん自然が豊かで鳥が飛んでいて、というのはあるんですけど、それと比べると八郎湖は人里寄り。町の中にある湖じゃないですか。その大きい水源を町の人達が利用している。なおかつ、その湖の資源を動物たちと人間が分け合っている。大きいものを分け合って、今ヘドロとかありますけど。そういうのも人間が利用しているってことですし、自然との一体性というのも大きな魅力だと思います。すぐ近くに自然があるっていうのはすごいと思います。やっぱり。

鎌田) 阿寒湖は人が関わらない手つかずの自然みたいな感じ？

生田) 手つかずの自然というわけではないんですけど。どっちかというところ「来るな」みたいな感じなんで。

鎌田) それに比べると、八郎湖は自然と人の一体感みたいなのがあると。

生田) 国立公園で保護しましょうではなくて、生活の中で利用しつつ環境を守っていきましょうって言う…すごく密着している。

鎌田) 単純な綺麗・汚いというわけではないということ？

生田) そんな楽な問題ではないと思います。

井上) 私は生田ちゃんとは逆かなとは思いますが、アオコとかヘドロとかむしろ資源だと私は思っています。ちょっと自分では感覚がおかしいとは分っているんですけど、アオコがでるとテンションが上がるっていうか…。今年も会えたねという気持ちになるっていうか…。ヘドロもこんなにたくさん！みたいな気持ちになるんですけど、関わりの薄い人達っていうか、生活から乖離している人達にとっては、臭いとか、汚いとか危ないとかそういう感じはあると思います。

ヘドロとかアオコってやっぱり小さい生物、ミクロキスティスとかアナバネとか、あと嫌気性の微生物とかがすごくたくさん働いたことによってできあがったものが、アオコだったりヘドロだったりするんだよということを知ってもらえれば、それもむしろ魅力になるんじゃないかなっていう…。

すごい綺麗な場所っていうかリンとか窒素とかが少ない場所だと見られない光景だと思うので、むしろそれを解決する方法も模索していくべきだし、危ないことには変わりはないんですけどこれがどうやってできているのかを学んだりとか、それ自体の魅力というかちょっと違う視点で見てもらうことも大事なのかなと思います。

生田) 利用できたら資源だしさ。発生源とかもモデル型になるしいいよね。

井上) 自然の資源、田んぼからできあがったもみ殻とかイネとか、ものもすごい大量にあるし、海からの資源もすぐ持ってこられるような、すごい人間も関わり合って、資源もいっぱいあって、手を加えやすい場所ってことは、ある意味学ぶこともたくさんある場所なのかなと思います。

鎌田) 井上さんは、アオコとかヘドロを資源だと思っていて、好きでいろいろ考えているけれども一般の人からすると臭い・汚いと嫌われているというギャップをなんとか埋めたいってということかな？

井上) 自分たちから出たものが、結果的にこういうことになってて、でもそれは自然の中にあるこういう生物が働いているからこういう状態になっているんだよっていうのを追っていけば、自分たちが関わって、生物の働きはすごいみたいなそういう新たな学びの場にもなるのかなと思いました。

谷口) 井上さんの循環みたいな考え方は大学入ってから？それとももっと前から？

井上) そうですね。高校のときから身近にある捨てられているものというか、自分たちが隠したいものを利用して自分たちが守りたいものを守る、廃棄物を利用して自然を豊かにすることは念頭において。その中心にあったものが八郎湖で、八郎湖の周りで今は使われてないものがどのように使えるとか、どのようにできているとか、そういうのが面白いなと思ったのでそれを利用して、解決したいなって思っていました。

谷口) それは自分で？それとも誰か先生に教えてもらった？

井上) ヘドロであったりとかアオコであったりとかは先生から学んで、それをどう解決したいとかはいろいろ自分のなかで考えたりとか、論文とか本を読んだりとかしてどんな風に使われているとかは調べていました。

鎌田) とても環境教育的な考え方ですね。次に野宮君、お願いします。

野宮) 八郎湖の魅力って言われると、魅力しかない場所なんで。

まず、秋田県にも言えることなんですけど、秋田県自体が自然が豊かな土地であること。水生昆虫とかの視点に立つと、僕の出身の静岡県では、人の生活のすぐそばにゲンゴロウが暮らしているとか、はっきり言って無い場所の方が多いので。大淵村は数は減ってきてはいるんですけど、それでもまだ残っている。そう考えてみても、生物のポテンシャルの高さっていうのはすごく生き物が好きな人達からしたら、宝の山みたいな場所になっているんじゃないかなと思います。

鎌田) 宝の山とききましたか。

野宮) そうですね。やっぱり八郎潟も元々は湖で、いわゆる湿地に該当するので、今湿地の数が減って
いたりするので、まず湿地と人の距離を近づけるってことを考えたい。年に一回とかでもお祭り感覚で
いいので、八郎潟産の鯉とか鮒とかをうまく調理できて、食べれる場を特に若い人向けにあったら面白
いし、「鯉は臭い」って言わないで、まず食べてみてよっていう。僕も食べたことないんですけど、美
味しいって話はよく聞くので、是非とも僕は食べてみたい。そういうのを皆で食べてまずは味の評
価を話し合えたらすごく面白いんじゃないかなと考えています。

鎌田) それは杉山秀樹先生(※NPO 法人秋田水生生物保全協会理事長)に聞いた話とかが影響を受けてい
る？

野宮) えっと…魚関係は杉山先生から技術的な指導を受けているので、こういうのは自分で考えてって
感じですかね。でも、杉山先生が地魚クラブとかやられているので、魚を食べること、人の生活の中で
昔は、外から食べ物を取ってきて、食べて、循環じゃないんですけど、生態系の中に人も関わってきた
という背景があるので、そういうことも考えてただ観察して数を知るだけじゃなくて、実際食べてみて
生態系の恵みがどんなものかっていうのを知り尽くしている人の方が、ちゃんと生態系を理解できるん
じゃないかと考えています。

鎌田) てっきり杉山先生に色々言われてそういうことを考えていたのかなと思っていたのですが、そう
ではないのですね。食べるって言えば結局実現しなかったけど、ザリガニ食べたいなという話もあった
もんね。あれもやったら、すごく面白いだろうなって。来年やれたらいいね。

鎌田) 八郎湖の魅力を活かすためにこういうことをやったら、自分たちと近い年代の後輩とかにも伝わ
るんじゃないか、八郎湖に興味を持ってくれるんじゃないかなっていう活動の案があれば教えて下さい。

生田) 私正直この年になって、興味を持つのってガチの筋金入りのオタクしかいないとっていて、
生き物、水質とか。私はどっちかっていうと、八郎湖を生活の場の延長線の学び場にしたい。だから、
小学生中学生くらいですよ。井川義務教育学校さんはフィールドワーク系でやっていると思うんです
けど、そういった活動を重ねていって、「八郎湖って危ないよ」って言われているけど、ちゃんと気を
つけて遊べばすごく楽しい場所だし、好奇心を満たす場っていうのもありますし、自然の豊かさ大切さ
を学ぶ場にもなりますし、そういう面で見たらすごく学ぶ場所として八郎潟って優秀じゃないですか。
これをすごく活かしたいなと思って。これの活動を通していって、小・中・高といって、大学になった
ときに「そういえば八郎湖ってこういう所だったよね」「こういう問題があったよね」っていう感じに
日常生活でぼろっと出てくるくらいになっていってほしいなというのはありますね。だから、今やっ
ている活動とかはすごくいいなと思います。

鎌田) そうですね。うちらはそういうところを目指していきたいなと思って、活動しているので非常に
ありがたい。他にも何かある？

生田) バードウォッチングとかもそうですね。動物観察も。あと生き物系のイベントとか今やっているじゃないですか。年代上から下までそういう活動やっているの。そういう活動をずっと続けて行きたいですね。盛り上がって行くと思う。それをいかに何年維持できるか。盛り上げていけるかっていう。

井上) 似ているんですけど、八郎湖周辺の小学校とか中学校とか高校とかの課外活動の一環で環境教育という形で組み込みたいってことが一つ。私みたいに県北や県南の、八郎湖から遠い存在の人とかって、八郎湖の今の現状とかどんなことが起きているのかとかそういうのを知らない場合がある。大きい湖がある場所って結構偏在しているので、遠いと湖の感覚もわからないですし、そこにできる生態系のことも全然わからない。それを知ってもらえるように、環境教育の一環で八郎湖から遠い場所、県外とかも八郎湖を題材にしたアオコとかヘドロとかをピックアップしたものをやれたらいいなと思う。

個人的にほしいなって思ってるのは、はちりバで使っている生きもののイラストがすごい魅力的で、イラストのストラップとか缶バッジとかがあったらいいな、と。環境教育終わりましたみたいなバッジとして八郎湖にいる生き物とかのイラストを渡すとか。あのイラストをポスターとしてお渡しして「秋田にはこういう自然もあります」みたいなことができればいいなと。個人的に私がほしいだけなんですけど。

鎌田) 野宮君はさっき聞いたけど、思いついたことがあれば追加でどうぞ。

野宮) そうですね、さっきのは今思っている若者向けの活動です。一般の人に魅力を発信するんだったら、秋田の人って鳥を見に来る人が多いので、淡水魚を食べる文化が減っているというかそもそもあまり無いと感じるので、「淡水魚ってどうなの」っていうイメージを和らげるじゃないけど、実はおいしいんだよ、ということができたら面白いと思います。

(5)

鎌田) 次行きます。これからみなさんの同年代とか、後輩になる学生さん達に八郎湖での活動に関心を持って関わってもらうためにはどういうことがあるといいと思いますか？さっきの質問と被る内容なんですけど、一応聞きましょうか。

生田) さっきの通りですね。今やっている活動の広報をフリーペーパーとかそういうのあったら県外の人とかも観光中に来て寄ってみて、へー秋田県ってこういう活動やっているんだみたいな感じで知ってもらって、知るって大事だと思って。そこから繋がっていけば。あんたそういえば生物系好きだったけど、秋田県でこういうことやってるらしいよ。なら、この大学に行こう、こういう所に住もう、そういう移住のきっかけにもなるのではないかなと思っています。

谷口) 移住のきっかけね。

生田) たぶん一番アオコとかヘドロの問題に対してすごく真剣なのはここだと思うんですよ。

谷口) そうだねえ。

生田) そう考えると隠れた魅力ですよ、秋田県の。

井上) 県立大自体が魅力だね。

鎌田) 人づてに紹介してもらえるというのは、東京ではなかなかできない魅力かもしれませんね。

井上) 紹介してもらえて、先生たちが地元の人たちとすごいコンタクトを取ってくれたから、自分たちも関わりやすくなっているっていうところが県立大のいいなと思うところ。

生田) 関係性がいいよね。地元の人達の。

井上) 金田先生のとこの学生です。っていえば大体あーって。

鎌田) それ面白いね。

井上) 長年積み上げて来てくださったから、自分たちも関わりやすくなっているのもある。

鎌田) 今、県立大のいいところっていうのが出てきて、話の本筋からは外れちゃうんだけど、他に県立大のいいところってどんな所だと思う？

生田) 最初は「何がマンツーマンじゃ」って思ったんですけど、先生方が偉そうにしないっていうか。言い方おかしいんですけど、対等に教えてくれて時間取ってくれたり、連絡してくれたりとかすごく親身になって生徒に接してくれて、すごく助かっているんで、すごくいいと思います。特に、理系だったら連絡物多い、提出物多い、実験わかんないのにどんどん積み重なっていくみたいな時に、先生と距離が近かったら、先生ここわかんないんですけどとか、言いに行けるんですけどいいですね。

谷口) 他の大学はそうではない？

生田・井上) あんまり聞かないですね。

井上) 研究室に配属している人達の名前は知ってる、呼べるみたいな。私も大学に入る前から、名前で呼んでくださるくらいの距離ですごく親身になって話してくれる先生が多かったので、ここしかないなと。

谷口) そうだね。たぶん、大学がそういう方針だってこともあるけど、県立大学の前身の農業短大の頃

からすごく地元の人達との敷居は低かったよねえ。アグリビジネス学科の校舎には、農家の人達が長靴で入ってくる。先生、うちの田んぼにしらみが出るんだけどちょっと調べてくれないかって（笑）。

生田） 地元の人から無茶振りされるって、それくらい実績と信頼があるってことですね。

谷口） もちろん研究室だから、論文書いて、業績上げてっていうのはあるけど、それはここ 20 年くらいの風潮で、以前は短大だったでしょ。2 年で卒業しちゃうから、そんな専門性もないわけよ。どっちかっていえば、農家の後継者を育ててるから、あの頃は全寮制だったんだけど、異性の部屋に入ると退寮なんだよね。退寮にしても卒業した後のことを考えて退寮にしていた。あいつは湯沢の跡取りだから出すわけにもいかないべ。じゃあ半年遅れにしてやるかって。その子の進路も見えてるので、その子の行く末を考えた指導をする。今でも「先生あの時はお世話になりました」って。一生の付き合いをしているっていうのが、今のこの大学にも残っているからじゃないかな。まあ、嬉しいです。

井上） 若い先生もそういう風に世話焼きな先生が多いから、そこも魅力だなと。

谷口） うちの学部で言うと、応用学科が一番とんがっているというか。サイエンスって感じでしょ。環境学科なんかだと、例えば分野がみんな違うから、あんまりとんがりはない。「俺が一番だ」って。後、生物生産学科にいた古屋先生、いいこと言うなって思ったんだけど。「科学者は最前線を目指す。でも、それぞれの分野に最前線がありますよね」って。良い言葉だね。それぞれの分野に最前線があるんだから、みんな目指しているんだって。そういう考えをする人、教授の中にあんまりいない。

鎌田） そういう時代があってこそ、今の時代の雰囲気なんでしょうね。ということが分りましたよね。ちょっと話を戻して、これから同年代や後輩の学生さん達に八郎湖に関わってもらうためになにがあればいいと思いますか？ネタ切れだったらネタ切れでいいです。

井上） そういうやつって内々のコミュニティも大切だと思うんですけど、やっぱり広報力っていうのを上げるために、パンフレットとかインスタとかツイッターとかそういう色々な人に目をつけてもらえるような、SNS も大切だなとは思っています。

生田） シンポジウムに参加するだけでも、あ、こういう活動している人いるんだって。ちょっと専門寄りの人達にも、興味持ってもらえるかなって。

鎌田） 県立大学の学生さん達は、八郎湖の活動とかの情報っていうのはどこで仕入れている？

井上） 大学構内のポスターとかはよく目にします。あと、八郎湯町のほうで釣り具屋さんがツイッターやってるんですけど、八郎湖の今の状況みたいなので毎日写真とってくれたりとか、八郎湖に関する情報とかがのった研究雑誌とかをリツイートとかもしてくれたりしてて、それを見たりしています。

野宮) 学生向けになるんですけど、まず生き物を取れる場所、自分たちで取ることを覚える活動をした
いなと考えています。大湯村で水生昆虫や魚をただ取っただけじゃなくて、ちゃんとリストでまとめ
てデータとして蓄積する。環境変化も激しい時代なんで、それがすごくわかるようになるんじゃないか
なと思います。だから、学生向けとしては実際に環境を見ながら、生息地にはどんな生き物が暮らして
いるのかというのを自分で取って覚えるとか。そこから後は自分で広げてもらって、八郎湖に留まらず
秋田県で見たりとか、秋田県で見ながら今度は地元と比較してみて、最後日本で見て世界で見て、とな
っていけばすごく学生としては立派じゃないかなって思います。

鎌田) 今年度、寮の前にモグリウム(※水草を育てる水槽)を置いたじゃん、マツモとか。あれは野宮君
から話があってやった訳なんだけど、ああいう感じで増やしていけたらいいのかな。

生田) 結構あの水槽、興味持ってくれてる人多いんですよ。

鎌田) よかった。

野宮) シーズンじゃないので、何がいいかわからないというのは当然なので。これからたぶん面白くな
っていくので。水生昆虫は、M君っていう子がいるので、一緒にやっていこうかなと思っています。

(6)

鎌田) ちょっと突っ込んだ話になるんで、話せる範囲で話してくれたいです。大学卒業した後、卒
業後の進路はどういう方向で行きたいなと今の段階で思っているのか、その希望っていうのは八郎湖に
関わってから考え方の変化っていうのはあったのかを聞かせてほしいなと思います。

生田) 私はもともと進学予定だったんですけど、県外の方に行ってやろうとずっと思っていたので
が、サークル活動とか秋田県のこととか八郎湖のこととかをやっていくうちに面白いなと思って、もう
ちょっとここで学びたいなと思って、秋田県立大学の大学院進学を考えています。変わったきっかけと
いえば変わったきっかけですね。大学院後はわからないんですけど、自分の研究がてらもうちょっと活
動に参加していたいなって。

井上) 私もこの院に進学して、今リンの回収剤を作っているんですけど、それを研究的じゃなくて、
地域との連携で作れる資材に改変したりしたい。就職は河川事務所とかに入って、環境教育をやっている
部署にできれば、自分の資材を用いて周りの人と一緒に失われてしまった自然っていうのを取り戻す
活動を続けていきたいなと思っています。一般企業にもし就職することになったとしても、はちプロと
かに卒業後も関わりたいなと思っていて、八郎湖の環境をこれからも見続けていきたいなと思っていま
す。

鎌田) 非常にありがたい言葉をいただきました。環境教育やりたいというのはいつ頃から思っていたのですか？

井上) プロジェクト WET の講習を受けたりとか、金澤先生の学生さんが積極的に資格取得していてその話を聞いていて思いました。そもそも WET の活動自体が面白くって、それを子供達とか、これから八郎湖に大きく関わっていく子達に自分たちの生活がどのように自然に関わっているかとか、どんな行動が未来に繋がるのかみたいなのを知ってもらいたいなというのをだんだん感じるようになりました。そもそも自分の自主研自体が地域の人達との関わりが大切だなというのは最初から思っていて、自分一人でやるのじゃ八郎湖は絶対だめだと思うので。八郎湖周辺の人達の協力を得たいなと思ったら、小さい時からの知識量が大切になってくると思うので、幼児教育的な形でできればいいなと思います。

鎌田) ありがとうございます。WET やった甲斐がありましたね。野宮君どうでしょう。

野宮) 僕の本当にやりたいことがガンの行動分野なので、これができれば一番ベストなんですけど、先生がいらっしゃらないので…。県外の院に進学して大湊村をフィールドとして使わせてもらいたいなと考えています。ガンは僕にとってすごい面白くて…自分をかき立てるようなものに出会わせてくれたのは大湊村なので、そういうところから見ると八郎湖の活動じゃないですけど八郎湖に関わった産物であることには変わりないのかなと思います。

鎌田) ガンをやりたいていというのは、いつ頃固まった気持ちなのですか？

野宮) 鳥の研究がしたいっていうのは小さい頃から思っていて、何がやりたいとかは特に無かったんですけど。僕は高校生くらいの時に鳥の言葉…シジュウカラって言う鳥が文法を持って会話する論文が世に出回って、そこから鳥の鳴き声っていう視点が僕の中で変わって、ガンに会った時ガンの家族のコミュニケーション能力の高さっていうか、何かしゃべってるんじゃないかあいつらっていうのが見てとれたので、これやったら面白そうだなという感じでしたね。ガンは魅力の多い鳥なんだというのを感じました。

鎌田) 大学に入った時点でガンがやりたいみたいな感じだったの？

野宮) いや、鳥の研究したいなと思っていて、自分が動き始めた時にガンがきて、小さい時から鳥を見ていたのでこれは面白いと。

鎌田) 大学入学時点では鳥って広く考えてたけど、それは堤さんなどと会って話している中でガンが面白いと感じたと？

野宮) 堤さんにはどちらかというと連れ回してもらっているって感じです。お願いして。僕もやっぱ知りたいっていうのがあったので。

鎌田) ガンがいいなと思うようになった経緯はありますか？

野宮) 大湊村の干拓博物館館長の船木さんが鳥のスペシャリストの方なので。ハクガンのことを話していたら、「やっぱりハクガンって変わってるよね」って話になって。そこからハクガンやりたいと思うようになりました。大湊村はガンをやるには環境が整った場所かもしれないですね。

鎌田) なるほど。いろんな人と会っていく中で固まってきた訳ですね。

(7)

鎌田) 最後はざっくりとした話になるんですけど、ここまでのインタビューを通して気づいたこと話せなかったことなどがあれば教えてください。

井上) 広報力の所で、図書館の入り口にたまにボードが出たりとかして紹介するところがあります。ここに八郎潟のことに関することが網羅的に展示されているところがあればいいなと思って。八郎潟っていか大湊村の文化であったりとか、アオコとか環境の改善の部分であったりとか、鳥とか魚とか、本棚(※県立大「八郎潟・八郎湖アーカイブ」)はあっても八郎湖に興味があって本を読もう気持ちがないとあそこってなかなか行かないし、手に取らないかなと思って。本とかリーフレットとかの概要が書いてあるシートと一緒に本が置いてあればなんとなくアオコに興味があるとか、なんとなく文化に興味があるとか、そういうときに軽い気持ちで借りられるのかな、と。そういうのが年に何回かあれば。

生田) 特集組んでほしい。

鎌田) 初期のパチカンでSさんが頑張って学祭のときに八郎湖のブースを作って、「八郎湖でこういう活動が行われています」という紹介するブースを作る活動は、3年くらい続いた時はありましたね。

谷口) 井上さんが言っているのは本1冊を紹介する…？

井上) コルクボードみたいなものがあるじゃないですか。本とその紹介が並べられていて、八郎湖の文化についてのコーナーとか、週間で変える。今回は八郎湖の文化、次はアオコ、次は鳥とか生き物とか魚とか、そういうのでちょっとしたイベント化みたいなことをしたら目に留まるかなと思います。

鎌田) Sさんがやっていたみたいなブースを復活させてみてもいいかも。あの時はまだ紹介出来るものもいっぱいあるって訳でもなかったから、はちプロとか他の市民団体とかの活動も含めてブースにする感じだったけれども、皆さんそれぞれ自分たちの興味分野で色々研究とか進めているわけだし、そういうのを紹介するブースみたいなものがあっても面白いんじゃない？どっちかっていうとはちプロというより大学の活動的な話になると思うんですけど、やってみても面白いんじゃないかなって聞いてて思い

ました。

生田) やるかって思ったんですけど、コロナで松風祭(※県立大の学校祭)中止だったなど。

鎌田) ここは一人づつじゃなくてざっくばらんにいきましょうか。野宮君どうですか？

野宮) はちプロのトンボを戻そうみたいな取り組み(※「八郎潟モグリウム」のこと)は、この種を戻したいとか、この種をキーポイントにして戻したいとかってあるんですか？

鎌田) 正直私はこういうのあんま詳しくないんで、受け売りなんだけど。こないだ千葉県立中央博物館の林紀男先生(※「八郎潟モグリウム」のアドバイザー)とやりとりして出てきたのは、「とりあえずギンヤンマが戻ってきてくれたらいいよね」っていうことは話してた。

あと、私や谷口先生は千葉の博物館に実際に行って林先生が同じ水槽をズラッと数百単位で並べて研究やっている所を見にいったんだけど、それを長年続けて調査を継続しているっていうレポートももらっています。そうすると、この水草にはこのトンボがやっていますとか、同じ水草でもここにおいてある水槽にはこのトンボがここだけ来ますみたいなこととかがあるらしい。

野宮) もうちょっと調べないとなんとも言えないって感じですかね。

鎌田) そもそも俺理系じゃない。その辺の知識に関しては全然無いから当てにしないでください(笑)。

野宮) 大潟村の南の池なんですけど、県のレッドリスト 1A の糸トンボっぽいのがいたんです。虫用の網じゃなくて水用のタモだったので捕まえなかったんですけど。一応ちょっと調べた範囲だと大潟村が生息地になっていなかったんで別の種だろうと思ってその時はやめてしまったんですけど、ちゃんと今度は捕まえて調べてやった方がいいと思いました。

鎌田) 調べて林先生と相談して、「八郎湖にもどしたい指標種はこれです」っていうのは決めてもいいかもね。

野宮) そうですね。これは杉山先生の調査なんですけど、その時も「この種を指標種にしよう」みたいな感じでやっていたので。その方が説明もしやすいじゃないですか。この生き物がいますよ、これはどのくらい数が減っているんで、その数が減っているものに対して繁殖地というか場所を提供できてますよって。発信する上ではすごく分かりやすいし、誰がみてもすごいなって思う場所だと思うので。

生田) それ関係で、記録取りたかったんですよ。各所のうたせ館、八郎潟小学校、井川、県立大、中央高校でどんな生物が来てるかっていうのを記録取りたかったんですけど。ちょっといろいろ勉強が重なり出来きなくなりって感じだったんですけど、やっぱり取りたいんですよ。記録。

谷口) どうすればいい?

生田) どうしましょう。

鎌田) それやりたかったら喜んで車出すけどね。

谷口) 3人ともありがとうね本当に。泣きたいのは私のほうだったかもしれないね。20年前のことがフラッシュバックされてきて、なんかやっとうこういう学生さん達が出てきたなってとっても嬉しいです。今までの、僕の知っている20年前からの話と、みんなが考えていることをちょっとつなげたらこういう風になるんじゃないかなと思ったことがあるので、聞いてもらってみんなの感想を聞きたいんだけど、知っての通りはちろプロジェクトの環境学習が対象にしているのが小学生なんだよね。これは15年くらい続けていて、実際に受講した子供達も延べ1万5000人くらいもいる。その1期生のSさんが強く興味を持った。ところが、小学校終わった後の中学高校大学では全然フォローアップができていなかった。それを何とかしたいよねっていうのが鎌田さんと相談したことがあった。

県立大学の八郎湖関係の最初のサークルは1期生が作ったかんかん(※「環八郎湖環境学習を考える会」)。そのサークルが一時期すごく盛り上がり、陸の植物ガイドみたいなものをみんなで作ったりしたことがあったんだよね。学生サークルっていうのはやっぱり浮き沈みがあって、やる気のある学生がわっといいる時は続くんだけど、いなくなると下火になってしまうと。県立大学は特に大学が小さいせいもあって長く続くサークルってあんまり無いんだよね。アンサンブルとか竿燈はあるけれども。やっぱり活発な子がいる間はやるけれど、いなくなると終わっていくっていうサークルが多くて、かんかんもがんばったけれど今解散して無いと。2つ目のサークルはパチカンで、パチカンも頑張っていたんだけど、Sさんが理系の研究室に入っちゃったもんだから、リーダーとして動けなくなってきたんだよね。そのころ鎌田くんがはちプロに入ってくれて…。

鎌田) いや、Sさんが1年生の時からいました。実はパチカン作るときから、立ち会っています。

谷口) 僕の考えでは、どうしたら八郎湖に関わる次の世代の人間を育てるかってこともずっと課題だったんだけど、どうすればいいか分らなかった。小学校のレベルでたくさんの子達に刺激を与えてきたんだけど、フォローアップができていない。大学には、学生達がサークルを作るんだけどサークルは浮き沈みがある。どうしたら安定した形ができるんだろうとずっと模索していました。

そこで鎌田くんが考えてくれたのははちプロ学生部で、これは僕の理解では大人達プラス学生。学生達に自由にさせるサークルじゃなくて、大人達が結構バックアップしながら進めるサークルだったのね。そのはちプロ学生部の子達で一番最初にやったのがはちリバ制作で。はちリバを作る予算を助成金で取って、そのお金を大人達が用意したけど、ゲームを作ること自体は私たちができないんだよね。そこを学生にやってもらおうっていうのが、大人プラス学生部の最初のプロジェクトだったわけ。これを作るのに3年かかった。最初AさんやSさんから始まって、最初にやった子は卒業して、やっとできあがったのが2年前。はちリバが出来て、大人達プラス学生部が本格的にスタートして、その頃に皆さんが入ってきて、鎌田君が試行錯誤しながら環境を作ってきて、皆さんがやっと2年生3年生になって、

それで一体この世代の人は何を考えているんだろう、っていうのでインタビューしてみたわけね。

正直、期待よりも10倍くらいの返事がきけて、とても嬉しい。今感じていることは、野宮君は関わりが短いけれど、生態学や生き物に関する関心が深いので、十分問題意識は持ってくれている。3人とも八郎湖の自然な活動にもっと引き続き関わりたいと思ってきている。それぞれ問題意識を持ってくれている。っていうことがとても嬉しいなと思った。

それをどうしたら実現できるだろうと考えた時に、今思いついたんだけど、あなたたちは学生枠でなくて若者枠つまり、大人の仲間。学生サークルっていうのは、学生が終わったら卒業していく、一時的な枠なんだけれども、そうじゃなくって、少なくともお二人は大学院に行くといっているからもう3年はここにいるわけでしょ。野宮君はあと2年いるので、今までみたいな学生として大人が用意した活動に学生が参加するんじゃないくて、企画する側に回ってもらって、やりたいって言ったことを大人たちが助けるから、あなたたちが企画を作ってもらって、あなたたちが作った企画をあなたたちに実行してもらう。要するに主催する側に回ってもらう。もちろん勉学が第1だからね、それを尊重した上なんだけれど、そろそろそういうことを考えてもいいのかなと思いました。どうでしょう。

問題はやるとなったときの計画で、どういうことをするのか、時間はどれくらいかかるのか誰に働きかけるのか、お金はどうするかっていうプロジェクトの企画書みたいなものをみんなに作ってもらいたい。あんまり大きな計画は最初は無理だろうから、1年計画くらいで。2人は来年4年生になるから、授業はほぼ無くなって研究室だけになると。たぶん研究室の先生は理解があるから、少しこういった活動も許してくれると思うので、そうすると卒業研究をする傍らの時間を使ってやって、1年くらいこんなことをしてみたいという計画を考えてもらって、鎌田君に連絡してもらって、必要なお金は僕ら大人が用意して、実際にやってもらうと。もちろんサポートもします。今度は、鎌田君一人ではサポートしきれないので、今度はみなさん企画者になるわけだから、どうやって学生集めたらいいのかとか、送迎はどうするのかっていう主催者側のことも考えてやってもらえたら、鎌田君の負担にならずにできるのかなと思います。

だから、みなさん言ってみれば、学生として八郎湖の活動に参加してもらって、だんだん問題意識が深まってきて、いよいよ参加者から主催者へって企画者へっていうかそういう立場に変わってもらっても良い時期なのかなと思うんだけど。どうでしょう、やってくれますか？

生田) なかなかはいとは言えず。面白そうだからノーとは言えず。

谷口) 重いことを考えれば大変なんだけれど、出来る範囲で。

鎌田) 一ついいですか。もともと自分は、学生の頃からそんなに積極的なほうではなかった。

主催者側に回るというのは、こういう立場になって初めてやるようになったんだけど、結局、やってみないと全然わからない。いくら、いろいろ準備整えても結局トラブルって起こるんだよ。やってみてトラブルが起こってそれを乗り越えようと、「これくらいなら何とかなるな」というレベルがだんだんわかってくるのね。これって社会人になってからもすごく大事なことかと思います。

社会人になると失敗できないというハードルが上がっていくので、今のうちにやって多少失敗してもいいや位の感じで気楽にやってくれたらいいなって思っています。

生田) それだったら観察のやつ1年やりたいですね。

鎌田) 是非やってほしいなとは思っています。

例えばですけど、来年度環境学習の時、モグリウムが置いてある学校などがある。そこに出前授業で行くときとか、みんなに決まったらお知らせするので、手伝いついでに一緒に行くみたいな感じはどうだろう。これだったら、こっちも負担が少ないし、様子見てくれる人が増えて助かる。車に乗れる範囲の人数ってことで限られてくるんだけど、そういうことは結構できるかなと思います。

井上) さっき私、ポスターの話したと思うんですけども。やっぱり、県南、県北の小学校とか中学校とか高校には行けないので、ちょっとでも知ってもらえるようにポスターを届けたいなと思っていて、私の出身校とかに行ってお話とポスター持って行って飾ってもらうお願いができればいいなと思うのと、そのポスターから授業以外の話が来たらいいなみたいな感じで。とりあえずパチカンっていうかはちプロの名前を知ってもらう行動も一緒にしたらいいかなって思いました。

鎌田) ありがとうございます。はちリバに使っているイラストのデータとかは提供できますので、ぜひ作ってみて下さい。積極的に広報してください。



3. 秋田公立美術大学 学生インタビュー概要

【日時】2021年2月22日（月）13:30~15:30

【会場】秋田県立大学 教室

【インタビュアー】

NPO 法人はちろうプロジェクト 副代表理事 谷口 吉光（秋田県立大学教授）、

※以後、「はちプロ」と略す

事務局長 鎌田 洋平

【アドバイザー】秋田公立美術大学 菅原 香織 准教授

【対象者】



氏名	山館 世弥 さん	深谷 春香 さん
所属・学年	景観デザイン専攻 4 年	2 年 ※2021 年度から、アーツ&ルーツ専攻
出身地	岩手県	東京都
はちろうプロジェクトとの関わり	2016 年～	2019 年～
大学で頑張っていること	卒業制作：アニメーション制作	生物部：熊の骨の標本作りと皮剥製作

【インタビュー内容】

（１）

鎌田 大学で頑張っていることを詳しく教えてください。

山館 大学で頑張っていることは、卒業制作でアニメーションをつくることです。

鎌田 （卒業制作）見に行ってきましたけど、機械の虫みたいな…なんかこう、動いていて…うまく説明できないけど。

菅原 虫です、虫。

山館 虫ですね。
錆鉄を食べて、体の中で精錬させて新しい純鉄に作り変える昆虫を考案してアニメーションにしました。架空の昆虫です。精錬虫（せいれんむし）です。

鎌田 ついでに聞くけど、頑張っていることとしてあと、個人的に虫も飼っているよね。

山館 はい。飼っています。ゴキブリ飼っています。

菅原 大きいんだよね。手のひらサイズの…

山館 大きめの、よくいるペット用ゴキブリ

鎌田 なんて名前？

山館 マダガスカルオオゴキブリっていう。



深谷 見た目結構違うなって、見に行った時に思いましたけど。
鳴いていてかわ…可愛かったです。

菅原 可愛かった？

深谷 はい、そんなに嫌じゃなかったです。想像していたものより可愛かったんで、これならまだいけるなって思いました。

鎌田 そういう趣味があるからこそ「はちリバ」制作にホイホイ釣られてきたわけですよ。
では次、深谷さんお願いします。

深谷 大学で頑張っていることは、生物部に11月ぐらいから所属していて、今熊の骨の標本作りと皮剥製作りの為に脂肪をとってなめしを行うために作業しています。

菅原 一昨年鹿の解体したよね。

深谷 そうですね。今年も熊と鹿両方ともやっていました。なかなか大変で…
山館先輩が岩手まで取りに行っていました。

菅原 何を取りに行ったの？

山館 岩手のマタギさんが鹿と熊をとったと、井上先生が連絡を受けたみたいで、僕の方に突然連絡が来て、「取りにおいで」みたいな事を（マタギさんが）言っていたよ、って言われて。

菅原 じゃあトラックか何かで？

山館 僕の車で。

菅原 死体を乗せて？

山館 死体を乗せて。

深谷 しかもその連絡すごい突然だったんですよ。夜中に井上先生から今持ってきている最中なんだけど、作業来れない？という連絡が来て「え？？？」って思いました。

菅原 彫刻実習棟に持ち込んだの？

深谷 持ち込んで今も、作業しています。

鎌田 前にその活動、生田さんがそういった活動是非やってみたいって言ってたから誘ってみたら？写真とかグループに送ってあげたら驚く人もいるかもしれないけど。

深谷 3年の先輩と一緒にやっている人がいるんですけど、その方にお繋ぎしたりします。岩手に取りに言った時に、岩手大学の人とも繋がったりしたので…

菅原 3年の誰？

深谷 F先輩です。アーツ&ルーツ専攻の人です。
新しい人とまた繋がるのもいいのかなって思ったので先輩に相談してみます。

谷口 その話だけで1時間聞きたいけどね。

（2）

鎌田 のっけから濃いですね。ありがとうございます。
じゃあ2問目行こうと思います。八郎湖に興味を持ったのはいつ頃かと、そのきっかけはなんだったのかという事を聞きたいと思います。

山館 僕はこれに参加した時なので何年前でしたっけ…

鎌田 はちプロの記録によると 2016 年からですね。

山館 じゃあその時ですね。それに参加してから八郎潟に興味を持っています。

鎌田 当時はまだ「はちリバ」じゃなかったけど、それを作るという話になった時からだよ。

谷口 その時に鎌田くんには騙されて。

鎌田 違う違う（笑）。

菅原 里山生き物ゲーム？

鎌田 の八郎湖版を作りたいという企画でした。



菅原 それを地域プロジェクト演習の授業として取り組みたいと山館君から相談を受けて、授業に組み込まれて単位を取れましたね。

山館 はい、取れました。おかげさまで。

鎌田 もうちょっと昔話をすると、里山生き物ゲームの八郎湖版を作りたいと思っていた時に、もともと私が田村剛さんと知り合いで「美大生に関わってもらいたいと思っているんですけど誰かいませんか？イベントを今度やるのでよかったら声をかけてください」って言って当日に来たのが山館君です。突然だったので「本当に来たの?!」って思いました。

菅原 その時同じ学年の、何人かに声かけをして（はちリバの）イラストを描いてもらいました。

山館 そうですね。僕が参加してから結構経っていました。

鎌田 その会に山館君が来て、2017 年度プロジェクトに関わってくれた美大生は山館君 1 人でした。

深谷 その後 2018 年度 1 年間で制作していたんですよ。

鎌田 その時に M さんとかが関わってくれて、一緒に制作を進めた感じでしたね。
それまでは県立大生の中に山館君が入ってきて色々、ゲームを作っている知識とかをアイディアとして出してくれていましたね。

菅原 ゲームのルールどうしよう、とかね。一生懸命やったよね。

鎌田 山館君は2016年から、かれこれ5年という付き合いですね。

深谷 私は、山館先輩が地域プロジェクト演習にはちりバが授業として持ち込まれて、完成した後に、そのゲームをどう普及していくのかという授業に興味を持って、授業に参加したのが始まりでした。秋田に来たからこそ自然に関わりたいと思った時に大学の中でそう言った活動があると知って、興味を持ちました。

鎌田 大学に入る時から秋田の自然に関わってみたいと思っていたの？秋田にせっかく来るなら？

深谷 そうですね。秋田でしかできない事を探していたので、もともと八郎潟のこともきっかけは忘れましたが知っていたので。八郎潟の環境問題を授業の時に初めて認識して、関わってみたいと思いました。

(3)

鎌田 はちプロ学生部に参加してみようと思った理由を教えてください。さっきと同じ部分がかなりあると思うけど、追加で話せる部分があれば聞いてみたいと思います。

山館 さっき話した通り、田村さんに会ってやってみないかという話があって。

鎌田 はちりバの制作の時にうちのイベントに参加してくれて、それで初めて知った感じだよね？岩手にいた時から八郎湖の存在は知っていたの？

山館 全く知らなかったです。こっちに来て田村さんに紹介された時点で初めて知りました。それまで岩手では、もともと僕は美術じゃなくて高校の時には生物部に所属していたので、生物の勉強をされていて岩手の自然とかは結構知ってはいたんですけど、県外はあんまりでした。

鎌田 じゃあ本当にあの時に来るまでは八郎湖のことを知らなかったんですね、了解です。学生部に参加してみようと思った理由は多分誘ったからだとは思いますが、そういうことでいい？

山館 そうですね。これは切れぬ縁だと（笑）。

鎌田 逃がさない、逃げられない（笑）。
はい。ありがとうございます。じゃあ深谷さんお願いします

深谷 私がはちろうプロジェクトに関わろうと思ったのが授業関係でした。八郎湖自体をなんで知っていたのか覚えていないですけど、昔から知っていました。実際どういう場所なのかということは、こっちに来るまで知らなかったです。
中学の時から秋田とは関わりがあったので、その中で知ったのかなと思います。
中学の修学旅行で秋田に来た時は、田沢湖とかですけど、そういった関連で秋田のことを学校で習っているうちに知ったのかなと思います。
ちょっと正確にいつ知ったのかは曖昧なんですけど…

鎌田 田沢湖に来たということはわらび座の修学旅行？

深谷 はい。わらび座の学習できて、そこで農業体験を一緒にしていました。

鎌田 ソーラン節ワークショップとかやった？

深谷 はい。やりました。最初にワークショップやった後に、5泊6日だったのでその後3日間くらい、班に分かれて農家さんに色々お世話になっていました。

鎌田 その頃から秋田には縁があったんだね。

深谷 多分その時に秋田のことを知る授業があったので、その関連で八郎潟のこととかも知ったのかなと思います

(4)

鎌田 では次に行きたいと思います。もうちょっと深いところを掘る作業になるんですけど、はちろうプロジェクトの活動に参加してきて、八郎湖にどんな魅力があると思いますか？そしてその魅力を生かす若者向けの活動はないか、こんなことできたらいいんじゃないかなというところを、個人的に思っているところで構わないので、聞かせてほしいなと思います。
どんなところが面白いと思いますか？

山館 やっぱり他の秋田の他地域と比べて、いろんな社会問題が多い、干拓だとか、干拓に参加する時にオランダの企業が入ってきたりだとか。
秋田自体が、鹿とかを取りすぎて絶滅させてしまったりとか、クニマスの問題とか、クマゲラとかも追いやってしまったりとか、自然的な無知のところで淘汰してしまっている、そういった事件が多いと思うんですけど、八郎潟に関しては無知の分類とかではなくて社会的な意味でものすごい強い土地の開発だったので、全国的にみても珍しいというか、大規模すぎるというか。
だから、美術大学だと社会に対する批評みたいなことをすると思うんです。作品とかでメッセ

ージを込めるという時に。だから秋田県内でそういったメッセージを込められる、そこでやる意味を考えた時に八郎湖というのはすごく意味のある場所だと思います。作品を置きやすい、ここに置いたことによって、こう言った意味が存在するよってというのはすごく出しやすい土地だと思います。

谷口 初めて聞いた、そういう意見。

山館 いま上小阿仁プロジェクトって秋美が昔からやっているものがあるんですけど、そういう観点だと上小阿仁よりも八郎湖に作品を置く方が社会的に問いかけをしやすいと思います

谷口 じゃあアート展でもやりますか？

山館 そうですね。なんか作品を置いてそれをコースみたいにして、そのコースを自転車でツーリングさせるとか、そういったまちおこしのムーブメントが起こせば大きく変わるのかなとは思います。

鎌田 ツーリング？

山館 ツーリングとか、自転車とか秋田で盛んじゃないですか。スポーツの競技とかやってる人からすると、アートってすごく珍しいものだけど、そういう人たちが拠点を決めて、その拠点から次の拠点へ向かうツーリング、バイクのツーリングでもそうですし、フラッグを集める感じで作品を転々とするコースを作れたら楽しんで八郎湖の問題にも関われる。広い土地があるなら、そういう方向性の方が正しいのかなと

谷口 全国的にみてそういう取り組みってあるんですか？そういったモニュメントを回るツアーみたいなものは。

山館 あると思います。僕はあんまり知らないんですけど
日本だと愛知トリエンナーレだとか、現代芸術の四国のどこでしたっけ？

深谷 瀬戸内芸術祭と言って、香川でやっています。

菅原 そう。瀬戸内の小島を丸々、空き家とかを会場にして作品にしたりとか。

深谷 地域全体に作品を置いて、巡りながら地域と関連させた芸術祭やトリエンナーレなんかは割とあると思います。

鎌田 もう一ついい？

さっき山館君は高校の頃から生物が好きって言ってたじゃない？でも今八郎湖の魅力って聞いた時に社会的な問題の方が面白いという風に言ってくれたわけだけれども、そういう社会の問題に目が向いたのはどういう経緯だったの？

山館 昆虫とかは周りの環境に左右されやすいものだと思うんですけど、そうになるとどうしても人間の営みとか変わってきちゃう。

ダムの開発ですぐに上流の流れが変わったら、上流の流れを利用している生き物はすぐに途切れてしまうじゃないですか。カワゲラ系とかは繊細なので。

そうすると、人間の行いに目が行く感じになっちゃうんですね。自然だけではなくて、人間の行いで生き物がどう変わっていくかという視点は、昆虫独自ではないですけど、昆虫とかは特に顕著に見えてしまう。

哺乳類とかの研究をしている人もそういう視点を持つと思うんですけど、昆虫ってどうしても研究をしていく過程で最終的に結果を出す時に、なんでこの昆虫は減ってしまったのかとか結論を出すと、やっぱり人間に行き着くケースが多い。

だからなんかそこら辺で八郎湖ってすごく人間的な行いが強いから、常に予想できてしまうというか、なんで生き物がいなくなってしまったかっていう部分が。

鎌田 なるほど。じゃああくまで生物が好きでそこから、生物にすごく影響を与えている人間活動、社会問題というものに目が向き始めたっていう流れってことですね。そういう意味で八郎湖はこれでもかっていうくらい人間が関わって変えた環境ですからね。

ありがとうございます。

この間県立大生に聞いた時は、生き物が多いだとか、それをどう活かそうかという話になっていたんですが…面白かったです。

じゃあ深谷さん、改めて八郎湖の魅力ってなんだろう？とか、こんなことやった方がいいんじゃないか？とか何かありますか？

深谷 八郎湖のこと自体は知っていましたが、知っていたと言っても日本の中でも大きい湖を埋めて、お米が食べられるように変えてしまった、もともとは湖の上にある大きな村という認識をしていました。ただ、それがうまくいったのかということはこっちに来て、実際に関わってみるまでは、生き物が増えたりしたということはあったみたいですけど、もともといた生き物たちがいなくなってしまったとかそういう問題自体はやっぱり関わらないと知らなかった。はちリバの活動を通して思ったんですけど、県内の学生、高校生の子たちも、地元の八郎湖に住んでいる子達も八郎湖に関心がない、無知だったりののが印象的でした。

さっき山館先輩も言っていましたが、環境としてもものすごく変わったという意味では珍しい場所なのかなと思います。

環境が変わってしまった中で、今変わった環境から、今後どのように寄り添っていくのかっていくのかは、はちリバに関わっている中で気になります。

今の環境でも人間が破壊してしまったものに対して完全に元に戻すっていうのは難しい中で

どう寄り添っていくのかということに対して、関わりとして魅力があると思います。ただそれがすごく伝わりづらいのかなと印象としてありました。

私がはちリバの授業に関わった時も、地域プロジェクトの授業の中でも関わった生徒が少ない印象もあったのですごくとっつきにくいのかなと思いました。

個人的に興味があったからこそ関わりましたが、どう若者に向けてやればいいのかはわからないんですけど、そういった発信はしていかないと続かないので。

菅原 長所もあるけれど短所も魅力というか資源と捉えると、八郎湖をめぐる活動そのものを若者に対して発信をする活動っていうのが大切ですよ。

深谷 その時に今のところ関わる学生っていますけど、突発的というか一時的に盛り上がりがちで長く続かないと、どのイベントに対しても思います。続けることを考えていった時に、若者向けの活動がないのかということもインタビューの内容にもありますが、山館先輩がさっき言ったみたいに関わり方として新しい関わり方を考えていかないといけないと思います。

鎌田 県立大生の子たちに聞いた時とはだいぶ視点が違ってきますね。

菅原 景観デザイン専攻の学生で大潟村をテーマに卒業研究をした学生がいました。結局干拓事業によって暮らす場所とか、大潟村自体の村づくりをどこでするだとか、どう言った屋根の建物にするのかとかも含めて色々研究して提案していたんですけど、東北工業大学の人からも、コミュニティ自体がどういう風に変化しているのかがすごく興味がある。研究対象として、とても興味深い場所であるという風に言っていました。
近々そのあたりをまとめた本が出版されるらしいので。

谷口 学生の卒業論文ですか？

菅原 その修士論文を書いた学生は社会人学生で、実際に建築士の仕事をしている方なので、宮城と岩手の三陸でスレートの屋根の研究をしていて、そこから大潟村自体の新しく湖を埋め立てて新しくそこにコミュニティを作ると言った時に建築形態もなんですけど、そういった全く違う事例なので非常に興味深い。

そこでかつてあった漁業を生業にしていた人たちもいたわけなので、その辺のところをちょっと秋田に行って調べたいと行ってらっしゃいました。

京都の京都市立女子大学の先生もオランダの干拓の歴史について調べていらっしゃる方が秋田の同じ大潟村の干拓の歴史について、秋田に来て明德館の図書館に行ったりして調査研究されたりしていました。

世界的に見ても干拓っていうキーワードと新しいコミュニティっていう視点が魅力なのかなと思います。大学生にとっては学術関連などの研究テーマとしての魅力が結構あるんじゃないかなと思います。

谷口 わかりました。

鎌田 とても基本的なことを聞くんですけど、やっぱり芸術関係の大学っていうのは社会問題がとても重要なんですかね？

菅原 重要ですね。現代美術に関しては社会に向けられた問いですね。どう行った問いを立てるかっていうことで作品が出来上がっていたり活動が行われていく部分があるので、社会に対する眼差しがそのままその場所の魅力につながるんじゃないかなと思います。

それが欠点であれいいところも悪いところも含めて魅力と捉えるといいのではないかなと思っています。そこから新しい方策が生まれるかもしれないじゃないですか。課題を解決するために、何ができるのか、八郎湖から世界とどういう風につなげていく方法があるのかが見つかるかもしれないので。

谷口 美大の学生さんたちは、そういう自分たちの製作のモチーフをいろんな形で探すと思うんですけど、その一環で社会的な問題を調べたりするっていうこと、授業やゼミでやるんですか？

菅原 はい。深谷さんが3年で所属するアーツ&ルーツっていう専攻なんですけど、アーツ&ルーツなので roots の部分をフィールドワークを行なってそこから作品を作っていく。

深谷 作品を作るプロセスなんかも含めて、研究していくみたいな考え方に近いと思います。

谷口 ルーツは「根」の方ですか、Arts と roots、シャレじゃないですけど

菅原 アーツ&ルーツ略してアーツルってみんな呼んでいますね

(5)

鎌田 次の質問に行きたいと思います。

また今の話と被ってしまうと思いますが、これからみなさんの同年代や後輩の学生さんたちに、八郎湖の活動に関わってもらって、それを続けていけたらいいなと思っているんですけど、そのためには何があるといいと思いますか？

さっきの話で、色々言ってくれていたのでもそれに加えて何か話せることがあれば教えてください。

山館 そうですね。そういった大きいものはやっぱり長いスパンなので、現実的に難しいなっていうところはあると思うんですが、前やったカードゲーム(はちリバ)みたいに物としてアウトプットしていくということなら、もっとやっていくべきなのだろうなと思います。

例えばなんですが、ペットボトルのラベルのデザインだとかお菓子を作った時のお菓子のパッケージだとか、細かいところでもいいので、美術的な意味での視点をものに取り入れていったらそこからこのデザインはこういう問題があるからこういうデザインになっているんですよというきっかけ作りみたいなことですよ。

完全なパッケージだけだと、パッケージとしての良さはあるけどそこにはその土地由来の意味はないじゃないですか。

美大生とかがデザインしていけばここにはこういうデザインがありますよ、含みを持って作っていますよっていうメッセージができていくので、それを少しずつ構築していくのが先なのかなと思います。

谷口 少しずつ構築していったら、最後はどうなるっていうイメージですか？

山館 イメージなんですけど、まず問題をいろんな人に普及していく、こういう問題がこの地域にはあります、この地域はこういうところですよ、っていうことを普及していく。八郎湖は干拓をしているっていうことを今はいちいち説明していますが、もっと常識的にしていけないと説明がなくなってしまうと思うんですよ。毎回、毎回説明していけないといけない。そうではなくて、そういう土地があるっていうこと自体をみんなに知ってもらわないといけないわけだから、取り組んでいることを示すためにも細かいところ、パッケージデザインとか動画で配信するだとか。僕はアニメーションをやっていますがCMだとかで絡ませていくっていうことは大事なかなと思います。

鎌田 「八郎湖って言えば何？それどこ？」みたいな話から始まってくるっていうのをもうちょっと、美術の視点を入れていくことで、「八郎湖はあそこね」「八郎湖が水質の問題で悩んでいる」といった共通認識みたいなものになれば、という感じですかね。

山館 白神山地って世界遺産として登録されているからみんなに認知されているところはあると思うんですけど、白神山地自体に興味を持つっていうのは、世界遺産に登録されたからではなくて、白神山地自体を押し出すための、プッシュしてくれるデザインの後押しってすごくあったと思うんです。水とかでも白神山地の水って売ってると思うんですけど、それでいちいちパッケージを見ると白神山地はこういうところだと書いてあって、それがすごく下の方でちゃんとあるからこそ、いざ世界遺産に登録されても認知されるのが早いんだと思うんです。

谷口 地域ブランドなのか、またはアイデンティティなのか。
白神といえばコレみたいな、イメージみたいなものを作った方がいいという提案ですよ？

山館 そうです。白神山地という森を知って、アカゲラがいて、アカゲラをコミュニケーションの視点で言ったら、キャラクター化してそのキャラクターをゆるキャラみたいにさせたら可愛いじゃないですか。それがお土産屋に置かれて誰かが買ったりすると、このモチーフはアカゲラだ

よってという流れができるじゃないですか。ゆるく入っていけると思うんですよ。

菅原 マーケティングなんかで「タッチポイント」という考え方があります。広く知ってもらうために、ターゲットとしている、今回の場合は若者や後輩の学生たちがどういうタッチポイントでどんな場面で八郎湖を知ることができるか。ターゲットが普段目にするものってなんだろうってなった時に例えば SNS だとか、自動販売機で買えるようなペットボトルのラベルに八郎湖に関するものが情報発信されているだとかがある。日常生活の中に、ターゲットが手にする、目にする、聞いたりする、そういったところに八郎湖をどうやって忍ばせるか。そこに動画であるとかアニメーションであるとかがあります。

若者に人気の「Tik Tok」というアプリがあるんですけど、世界的にも有名で逆にそれで事故や事件が起きてしまっていて、息を止めるっていうパフォーマンスをして死んでしまった人とかいるんですよ、なんかそういう風に凶器にもなるんだけど、それだけメディアの発信というのをそのまま見れてしまうんですよ

アイスバケツチャレンジが流行ったじゃないですか。氷が入ったバケツを被るっていうチャレンジが全世界の人がやっている動画をそこにアップするみたいな。

そしてそれが広がっていく、だからその情報のタッチポイントを意識して関わってもらう前のどこで八郎湖を知なのか、プロジェクトを知なのかという部分をデザインするために、物として積極的にアウトプットしてそれをデザインしていくっていうことを山館くんは言っていたんだと思うんです。

山館 そうです。はちリバ作ったじゃないですか。あれってタッチポイントとしてはハードルがちょっと高いんです。というのもゲームをプレイするには、まずルールを覚えないといけない、ルールを覚えるのに他の人が必要になってくる、一つ一つの段階、段差がある。それがカードゲームの本質なんです。そう考えるとガチャポンとかで出てきたマスコットをキーホルダーとして付けるのはすごくタッチポイントが低いレベルのものになってきます。そう考えると八郎湖にはレベルの低いものがあまりないんです。だから一回一回説明が必要になってくるし、八郎湖に精通していて説明をする誰かが必要になってくる。

ポケモンとかだとたくさんいる中で、サニーゴっていうキャラがいるんですけどサニーゴっていうキャラクターはサンゴのキャラクターなんです。サンゴのキャラクターなんだけど、イギリスを舞台として生まれたサニーゴは白くなっていて死んでいる、ゴーストタイプになって登場したんです。それだけで若者は、この地方ではサンゴがなくなって死んでいっているのが問題だということがわかる、その情報に繋がりがやすくなっている。そういうキャラクターの作り方で八郎湖だったら干拓で死んでしまった貝の死骸が幽霊みたいに漂っていたりしたら、おどろおどろしいけど直感的にわかってくる。キャラクターとして。

谷口 考えたこともなかったです。へえ。

菅原 なんだっけ。ポケモンを探して歩くやつ

菅原 「Pokémon GO」だ。Pokémon GO で八郎湖で取れるポケモンみたいなものってないの??

深谷 ポケモンが出てくるポイントと場所は関連性があるみたいですよ。実際にゲームをやったことがないのでわからないんですが。

鎌田 石川代表から草木谷にポケモンを探しにきた人がいた、みたいなことを聞いたことがあります。

山館 Pokémon GO とかは、あまり問題と密接にはならないですが、今年の卒業制作とかで、キャラクターデザインをしている人がいましたが、食べ物を捨てる人がたくさんいて日本でも問題になっています。ラーメンとか捨てている食べ物をモチーフにそれでキャラクターデザインしている人がいたんですけど、そういう風に移り変わっているんだなと思ったんです。ただの狐だから狐をデザインするとかではなくて、どういう狐がこういったデザインになっているのかっていう部分をみんな見るようになったんです。

谷口 すごく興味深いんだけど。そういうことを進めるとすると、いわばプロダクションというか何かキャンペーンをやるというイメージですかね。私が今聞いていて思ったのは、八郎湖の総合イメージ戦略実行委員会みたいなものがまず必要で、八郎湖のキーコンセプトみたいなことから考えなければいけない。

さっき深谷さんがおっしゃっていたみたいに、八郎湖は問題があるんだけど、その問題から入っても終わりが無いと思うんです。問題が複雑すぎて、考えても難しいよね、で終わってしまう。でも、いつまでも難しい話をしてもしょうがなくて、八郎湖の水質が改善されないまま40年くらい経っていて、みんな飽きてうんざりしている。いくら考えても綺麗にならないから嫌になってしまった。そしてだんだん無関心になっていて、負のスパイラルだと思うんです。

それをひっくり返すためには、正のスパイラルを作りたいんだけど、その正のスパイラルに必要なものはイメージ、ポジティブなイメージ。八郎湖は「汚い」「アオコ」といったネガティブなイメージがくっついてしまっているんで、もう一度綺麗なポジティブなイメージを作りたいっていうのは前から思っていたんです。

「モグリウム」はポジティブなイメージを持つ強力なツールだと思うんです。あれを見る限り透明な水で水草が自分に向かって生えてきている感じ、干拓前に地元の人が水面を見たときと似た感覚だと思うんです。それは非常に限られた干拓前の八郎湖の内容を持ったミニチュアを作ったに過ぎないんだけど、少なくともそこには綺麗な水の中に、水草が育つというイメージがある。その水草を増やすことによって八郎湖が綺麗になるかもしれないという希望を持たせるものがモグリウムにはあると思うんです。

モグリウムを広げていくのは僕らの一つの戦略だけど、そのためにはモグリウムを束ねるアン

ブレラコンセプトみたいなものがやっぱり必要になる。だけど八郎潟はあんまり巨大なものだから、アンブレラコンセプトを考えるのがすごく大変。

とりあえず、八郎湖の水質保全計画の最終コンセプトは「わがみずうみ」なんです。

それは、石田玲水さんという大正時代の詩人が、八郎潟で育った少年のことを謳った詩があるんです。それは干拓ごろに書かれた詩で、まさに消えゆく八郎湖を懐かしむ詩なんです。

県も「わがみずうみ」を掲げているのはいいんだけど、掲げているだけでそのイメージが発する総合プロデュースっていうのがないんだよね。ただ水を綺麗にしますっていう目的しかなくて、人間の心の中の八郎潟を復活させるというような、人間に働きかけてイメージを育てていくような戦略を今の所誰も作っていない。私たちも何か作ろうと思うけどあまりにも非力で、八郎潟の存在がでかすぎるのでなかなかそれに見合ったものが作れていない。私自身はそういった総合的なコンセプトは必要になって思っています。

ただそれに基づいて八郎潟にマッピングをして、場所を決めてこんなタッチポイントを作りましょう、みたいな事が考えられるのであれば楽しいですね。

鎌田 だいぶ話が広がりましたが、別にそこまで考えろと言っているわけではないです（笑）。では改めて深谷さん、同年代や後輩の学生さんたちが八郎湖に関わってもらうためにこんなことやれたらいいかなって、さっき言ったこととは別の案とかがあれば教えてください。

深谷 秋美の生徒で八郎潟に関わる一つのポイントとして「地域プロジェクト演習」の授業があるというのは重要だと思うんですけど、私の代のときに参加した生徒ってすごく少なかったじゃないですか。授業前のガイダンスの時に、授業前は参加しようかなって言っていた友人がやっぱりいいやって言っていたんですけど、その時にどうしてやめちゃったの？っていうのを後日聞いた時に、「形あるものを作りたいかった」というニュアンスのことを言っていて、当時はもうはちリバができていたタイミングなので、やるんだったらはちリバを作るところにいたかった。けど今年入学してきて、今年ははちリバを広げる活動になってしまっていた。私は広げる活動に興味があったので関わりましたが、友人は授業内にある「巡り傘」であるとか形あるものの方がやりたいたいという風に言っていました。それが大学の中のニーズなのかなって思ったので、やるならば形として残るものをやりたいたいというのが学生の中で結構あると思います。そうして作っていく過程でさっき山館先輩が言っていたみたいに作ることがセットになってくるので、実際にある問題についてさらに興味が出てくる子ってやっぱりいると思います。授業に多くの人に関わらないと、八郎潟に興味を持ってくれる子ってその中でも一部だと思うので、形あるものを発信していくことは美大生が八郎潟に関わっていくっていう意味でも重要になってくるのかなって思います。

鎌田 やっぱり形あるものの方が。

深谷 やっぱり、人気あるっていう言い方があれですけど、学生に関わっていくっていう意味では。

鎌田 やりがいはあるだろうね。

深谷 キャリアとかそういうことも踏まえて、ポートフォリオに自分が作ったものを形あるものとしてほしい生徒も中にはいるので、さっき言っていたみたいなロゴを作るであるとか、その後も残るものに関わりたいたいという子は多いと思います。

鎌田 成果物だね。

菅原 だから、コミュニケーションツールを何かしら提案してもらってそれを作ったというのは、授業の中でやっているんですけど、深谷さんのときはワークショップの方がメインになっていたからね。

深谷 それでちょっと他に行っちゃったことが多かったのはしょうがないのかなって思いますけど。カードゲームはタッチポイントとして高いって言っていましたが、作る側からしてみたらそれはタッチポイントとしてそこまで問題ないのではないかなって思っています。そこから作る側から関わっていく人のことを考えると、形ある発信源があった方が新しく興味を持って関わりやすいのかなって思います。

鎌田 やる側としては、作ってからがスタートだからね。作るまでも大変だけど、できたらそれをどう使っていこうかっていうのも大きな問題だから、そこはやっぱり違うよね。立場として。

深谷 興味のポイントとして違うんだろうなって思います

(6)

鎌田 じゃあ次の質問に行きます。現時点で大学卒業後の進路にはどんな希望がありますか？それは私たち八郎湖の活動に関わってから変化したところがありましたか？

山館 僕はアニメーションを作ったので、そのアニメーションを前インターンシップの時にいった監督さんに見せに行ったりとか、アニメーション会社をちょっと受けてみようかなってところまではあるんですけど。

八郎湖に関わったことでよかったなって思ったことってすごくあって、八代監督っていうんですけど、ただアニメーションをやってアニメーションで済ませている学生ってたくさんいるけど、他に興味を持っている学生、僕だったら昆虫に興味があってそれなのにアニメーションをやっているパターンってすごく珍しいみたいです。アニメーション一筋でやっているんじゃなくて、他に興味があってその興味の対象をアウトプットする形としてアニメーションを選んでいるっていう、そういう他の興味っていうのは八郎湖で鍛えられているのかなって感じます。

鎌田 アニメの業界にいたがる人って、大部分がアニメが好きでアニメの仕事がしたいって人が
締めている感じなの？

山館 生き物好きだよって興味はあると思うんですけど、ここまでがつつり生物の本を読んだりとか、
研究とか高校の時にやっていましたよっていう人はあんまりいないと思いますね。

鎌田 はちリバの時もやたらと八郎湖のことをドーンと調べてきてたしね。凝り性だもんね。
なるほど、じゃあこれからそういう会社を受けてみようかなって感じですか。決まったことは
特にない感じだもんね。なら一旦実家に戻るの？

山館 でも、小田先生とかアニメーションを担当している先生がビジュアルアーツ専攻にいます
けど、その先生が「こういうあるから出してみない？」っていう話があったりしたので。
あと石山先生（景観デザイン専攻の教授）と進路相談したいので、しばらくは秋田にしようか
なって思っています。

鎌田 なるほど。じゃあもうしばらく秋田にいるってことか…ふーん…じゃあいざとなったら…なん
てね（笑）。まあ、それは置いて、ありがとうございます。
深谷さんはどうでしょう？

深谷 何も考えてなくて。大学の間が一番自由に時間を取れるタイミングでもあるので、今やりたい
ことに集中しようと思っていました。その先のことはあんまり考えていないんですけど、ただ
もともと地域の問題であるとかそういうものに興味があるので、だからこそ1年の時に八郎湯
のことにも関わっているってことは、秋田を知るという意味でもすごく意味があったこと
だと思っています。私はむしろアウトプットの形をずっと決めかねているので、先輩はアニメー
ションでアウトプットすると言っていましたが、私自身は作品を作るという意味でノープラン
なので、自分が今どういうことに興味があって、秋田の興味あることを深掘りしていきたいと
思っています。それこそ3年になって専攻に入ることもあって、もう少しじっくり考えたいで
す。実際フィールドワークとかを重ねて、調べていきたいっていうのはあります。

（7）

鎌田 ここからは自由に話していけたらって感じですね。ここまでのインタビューを通して、気づい
たこと、話せなかったことがあれば…何かある？

山館 だいたい話せたと思います

深谷 私も特に

鎌田 なら全体的に聞きたいこととかもうちょっと深めたいことがあればという感じですけど。

谷口 ありがとうございます。

美大の皆さんとちゃんと話すのが初めてなので、今動き始めたのかなと感じます。

芸術を学ぶということは表現ですよ。それは県立大学のように自然科学のやっていることと全く違う。自然科学は分析して、その現象のメカニズムを知る。そしてそれをどう表すのか？図表であるとか現象を見極める、見極めたものを科学的に説明する領域だけれども。皆さんの美術や芸術は、今日のお話を聞いた限りでは一人一人の学生がいわばテーマ、モチーフみたいなものを自分で持って、そのモチーフの考える対象を深めながら、深掘りしていった自分の得たものを表現する。表現したものを製作になるのかなって聞いていて思いました。

そういった視点で八郎潟を改めて見てみると、八郎潟や八郎湖の問題を表現するっていう営みがとっても貧しかったってまず思いました。特に干拓してから。干拓前の八郎潟時代については語りや写真で残されていますが、すごく豊かな湖があって、お金で考えれば貧しいけれども豊かな暮らしがあった。その後干拓が計画されて、八郎潟が失われるってなった時に、さっき言った詩人の石田玲水さんは「わがみずうみ」という詩を書き、それから何冊か写真集も出たりした。「消えた八郎湖」の写真集が出て、それで干拓された後は多分表現者がそこに来ていなかった、表現することがほとんどなかったんじゃないかって思います。

そもそも干拓時代は食糧を生産するという実学の世界だから、そこに人間的な胸踊るような芸術的なモチーフがなかったっていうのはまずあると思います。

ただ、大潟村ができた頃はすごい記録映画ができてたりしたんです。県立大学ができる前、私は農業短大で教えていたんですが、毎年入学式の時には新入生にそのビデオ見せるんです。だから今の八郎湖には干拓のイメージがある。それは大潟村にとってのポジティブなイメージですよ。だから新生の大地な訳だ。そういうモチーフに貫かれて干拓博物館ができた。だけど干拓されてしまった八郎湖の側には、ポジティブなイメージが無いわけです。干拓されてしまったわけだから。そしてそこで漁師をしていた 3000 人の漁業者たちは、みんな補償金をもらったので漁業権を放棄せざるを得なかった。干拓後も八郎湖では漁業が続いていますけれども、漁業権のない漁業なので、非常に権利的には弱い。漁民たちがみんな慰謝料をもらってしまったが為に、干拓を批判することもできなくなってしまった。でもやっぱり屈折した気持ちがそこにはあるわけです。八郎湖はどこにいったんだっていう。抑圧されて、意識の下に沈んでいるような感じがします。

私は今本を出そうとしていて、「八郎潟はなぜ干拓されたのか」という本を 6 月くらいには出す予定です。周辺地域にとって干拓っていうのは裏切りだった、夢を裏切られた干拓だったっていうモチーフで本を書いています。そんな気持ちがある。しかもその後アオコで水はどんどん汚くなる。水質も悪い。周辺の人から見れば裏切られた干拓。大潟村の人たちは新生の大地だと言う。みんなそれぞれ違ったイメージを持っていて、それらが錯綜していて、表現するっていうのはなかなか考えづかったんじゃないかって思うんです。

だけど八郎湖の研究を 20 年くらい続けてきて、その段階はもう超えないといけないんじゃない

いかって、いつまでも難しい難しいばかり言っていると、人の心は腐ってしまうって、あまりにも長く停滞するから、水も腐ってアオコが出るんだけど人の心も腐ってしまう。だからこそ新しいポジティブなものとしてモグリウムにたどり着いて、これは広げないといけないと思っているんだけど、これはあくまで一つの回路、八郎湖を再生する為の回路でしかなくて他の回路はいくつもあると思うんです。

今日皆さんに教えられたのは、八郎湖を表現する、あるいは現状を表現するって言うより八郎湖の希望、この難しい環境の中で人々は生き続けなければいけないし、そこで生まれ育った子ども達に地域で生きる意味をポジティブに伝えなければいけない。難しいばかり言っていたら子どもには希望が無いので。そういうことを伝えるための何か表現っていうものが大事になって思い始めました。

参考になるかはわからないけど、水俣病の水俣ってありますよね。水俣からはいろんな表現者が育ったでしょう。写真家のアメリカ人のご夫婦で水俣に住み着いて、写真を出したとか。私の出身の上智大学は恩師の先生の一人が水俣の研究をしていて、水俣ではなぜ芸術家がたくさんいるのかっていう本があるんですが、他の公害が起こった地域では表現者が全然出ていないけれど水俣にはたくさんの表現者が生まれているのはなぜなのか。それは新潟っていう水俣という地域が持っている独特の力なんじゃないかっていうようなことを書いた本があって、研究者がいます。

だから八郎湖もすごく表現しづらい場所ではあるんだけど、そこから何を表現すればいいのか、この地域で生きる子どもたちにとって、地域のアイデンティティ、地域の希望を伝えるための、何か表現が必要なのかなって思って今日話をうかがっていました。

それともう一つ感じたのは、山館君が八郎湖をいわばフィールドにして、山館君自身のテーマを深めた場所になったのかなって思いました。実は、今日のインタビューに先立って県立大の3人の学生にもインタビューしたんですが、八郎湖に関わりの深い生田さんと井上さんも同じように自分のテーマを見つけたみたいだったんですね。例えば、生田さんは八郎湖を学びの場所にしたい、自然の豊かさを学ぶ場所にしたい。井上さんは壊れた循環をどうしていったらいいんだろうか。野宮君は、八郎湖に住む生き物のポテンシャルを人々に知らせたい。

八郎湖がさっき言ったみたいに、まだ答えはないんだけど、すごく矛盾と資源の宝庫であるがゆえにその矛盾に満ちた八郎湖をフィールドにして学生が関わって時間が経つことによって、それぞれの方が自分のテーマを探せる場所でもあるのかなって、そんな風に思いました。だとすると私たちおじさんたちが、仕事としては若い人に来てもらって、どうやって八郎湖の矛盾と豊かさを知ってもらう機会を作るのか、そんなことを自分たちがやるべきなのかなって思いました。

鎌田 菅原先生、ここまでずっと聞いてどうですか。

菅原 山館君が「はちろうプロジェクトで単位をください」って言ったことがこのプロジェクトを知ったきっかけでもありましたので、もちろん八郎湖は干拓された場所であるっていうのは知っ

ていましたし、大潟村の干拓博物館とかも行っていましたけど、ここまで関わるようになるとはその当時思っていなかったです。地域プロジェクト演習の授業の中でも、美大生として地域のプロジェクトに対してどのような提案とかアウトプットができるのかっていうのを授業の成果として作ってきたというところがあるので、引き続き、来年の授業ではモグリウムを設置に関してまたやって行きたいなあと考えています。

鎌田 ぜひぜひ。

それでは、インタビューはここで締めます。どうもありがとうございました。

